

REPORT

ホームページ情報

世の中は新型コロナウイルス感染の第7波の真っただ中にあります。現在、当院では感染対策のため面会制限、院内・施設内見学制限などを願っています。本来ならば実際に施設内をご覧いただきたいところですが不便をおかけしています。

そこでホームページのPR動画を通じ法人内の施設や活動をご覧頂くこととしました。第一弾としてリクルート動画を掲載しています。様々な職種の中から「看護師・介護士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士」にインタビュー形式で行いました。(QRコードを読み取りご覧ください。)また今後「病院・老健・デイケア」についても随時掲載します。当院の機能や環境をできる限りお伝えできるように努めますので、よろしくお願ひ致します。



動画はこのQRコードを読み取りご覧ください。

リハビリスタッフ



看護スタッフ



介護スタッフ



※コロナ感染対策を施し、撮影時のみマスクを外しております。



◆当院へのアクセス

JRの場合

「南小倉駅」(日豊本線・日田彦山線)より片野方面へ徒歩10分

バスの場合

「木町二丁目」バス停(ファミリーユサ前)より小倉南区方面へ徒歩10分

都市高速の場合

「紫川IC」清水方面車線出口よりすぐ右側

カーナビでお越しの際は、

NAVI 北九州市小倉北区篠崎1丁目5-1と入力してください。



KR 医療法人 共和会

小倉リハビリテーション病院／介護老人保健施設 伸寿苑／共和会地域リハビリテーションセンター

TEL.093-581-0668 (代表) FAX.093-581-3319 (共通)

〒803-0861福岡県北九州市小倉北区篠崎1丁目5-1 <http://www.kyouwakai.net> 共和会 検索

公式SNSで情報配信中!



Careline

KYOUWAKAI Press
「ケアライン」2022夏号／コロナ禍における老健機能

○発行
医療法人共和会小倉リハビリテーション病院／連携広報部 井上崇

Careline

KYOUWAKAI Press ケアライン

2022

夏号

特集 コロナ禍における老健機能

REPORT ホームページ情報(リクルート動画公開)



夏井ヶ浜と浜木綿(芦屋町)

夏本番を迎えました。新型コロナウイルス感染症は6月に一旦減少傾向となりましたが7月に入り再拡大しています。自治体も「第7波に入った…」とし、福岡県内は7月末に一日の感染者数1万人を超えこれまでにない感染状況となっています。現場では基本的な感染予防を第一とし徹底した取り組みを行っています。

さて今回のケアラインはそうした厳しい状況下での発刊となりましたが、「コロナ禍における老健機能」と題し介護老人保健施設伸寿苑より現状を紹介しました。老健運営の課題は在宅復帰・在宅療養支援機能にありますが、コロナ禍におけるその役割と運営について考えてみました。またレポートではホームページリニューアルを紹介しました。これも感染下で立入りが制限される中、施設内の様子や活動を見て頂くとの思いから始めました。

コロナ禍3年目の厳しさに加え、少子高齢化による人材不足、物価高騰…等々、社会が抱える課題は様々です。組織運営もなかなか難しいところですが、前を向いて進むことを忘れず今回の夏号を作成しました。ご一読いただければ幸いです。皆様には時節柄ご自愛くださいますようお願い申し上げます。

令和4年8月 医療法人共和会 連携広報部長 井上崇

コロナ禍における老健機能

北九州市では6月中旬以降、概ね横ばいで推移していましたが、現在は上昇傾向に転じています。新型コロナウイルス感染症(covid-19)は、利用者の生活と共に施設運営にも大きな影響を与えてきました。今後はwithコロナを踏まえた施設運営を行っていく必要があります。今回は、コロナ禍における施設運営への影響とこれからのwithコロナの状況下での老健機能について述べたいと思います。



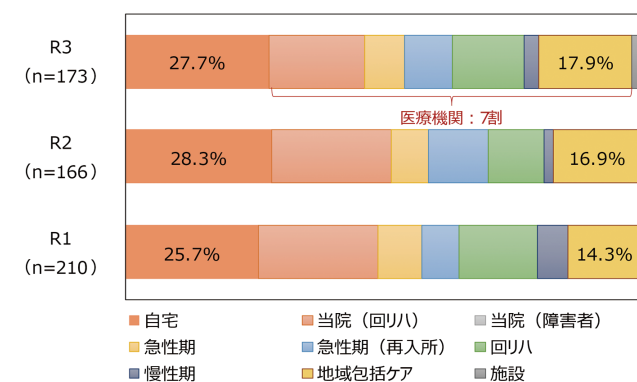
数字から見える施設運営への影響

稼働率への影響

社会保障審議会介護給付費分科会から2020年10月からの1年間の新型コロナによる各介護サービス事業所の影響をまとめた数字が発表されました。その結果は、老健施設と通所リハが他の介護サービスと比較すると突出して影響を受けていました。中でも「感染による入院や利用控えによりサービス利用者が減少した」の項目は老健でも高い影響を受けていました。稼働率の影響は全国老人保健施設協会でも調査しており、平均で2%、超強化型では4%低下していました。当施設も超強化型で運営していますが、コロナ前と比較すると4.3%低下していました。



図1 入所経路



入退所動向の変化…

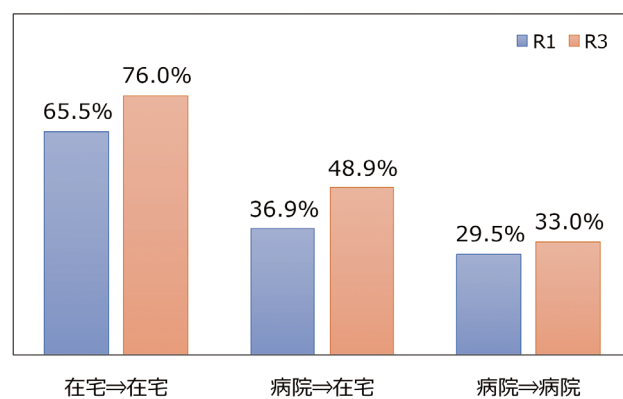
在宅からの入所者は在宅に戻る

当施設の入所経路を見ますと、自宅からの入所が例年3割近くあり、コロナ前後では微増傾向にあります。一方、医療機関からの入所は約7割近くありますが、地域包括ケア病棟からの入所が年々、増加傾向にあります(図1)。

また、入所先別の転帰先割合を見ますと、在宅から入所した方はやはり、在宅に戻る割合が高く、コロナ前後では10.5%増、病院から入所した方が在宅に戻る割合も12%増となっております。一方で、病院から入所した方が再度、病院へ戻る割合も増加傾向にありました(図2)。中には入所1ヶ月以内に病状が悪化し転院される方も少なくありませんでした。

医療度が高く、多疾患の方で地域包括ケア病棟から引き続き在宅復帰を目指して入所される方も増加傾向にあります。患者、利用者支援していく上で今後お互いの病棟、施設機能を熟知し、質の高い医療一介護連携を図っていく必要があると考えます。

図2 入所先⇒転帰先割合



在宅復帰に向けた支援方法に一部制限も…

しかし、職員、家族が安心できる工夫を

在宅復帰に向けた支援のあり様も大きく変化しています。私たちはこれまで自宅や退所予定先に出向き、地域での暮らしを再獲得するための住環境の整備やご家族への介助方法の助言等を行うための入所前後や退所前後の訪問、また、入所中のリハビリの成果等を確認するための試験外泊など、在宅復帰に向けた準備等を行ってきました。しかし、新型コロナ蔓延とともにこれらの活動も余儀なく制限を受けました。加えて家族との面会制限もあり、ご家族が本人の状況を十分に把握しきれないまま、自宅等に迎え入れる事への不安も垣間見られました。

そうした中、在宅復帰された方の約8割の方に安心していただけるよう家族への直接支援を工夫しながら行ってきました。支援のポイントは、職員に対して安全を担保した上で、感染リスクに十分配慮しながら職員が「かからない」「持ち込まない」ための対応です。具体的には、「感染予防対策(場所、対応時間等)を十分行った上で家族介助指導」、「電話や画像によるこれまで以上の入念な情報提供」、「訪問指導による生活、介護イメージの具体化が必要な方への退所当日訪問」です。「家族介助指導」は6割強の方に、「電話や画像による情報提供」が3割強の方に、「退所当日訪問」が2割の方に実施していました(図3)。また、家族に対しては安心・安全を保障するための、これまで以上の退所後の暮らしのイメージの共有化です。これは余裕をもって計画的に行う必要があると思います。これらの支援のあり様についてはコロナ前との検証を行う必要があると考えます。

withコロナの状況下での老健機能…

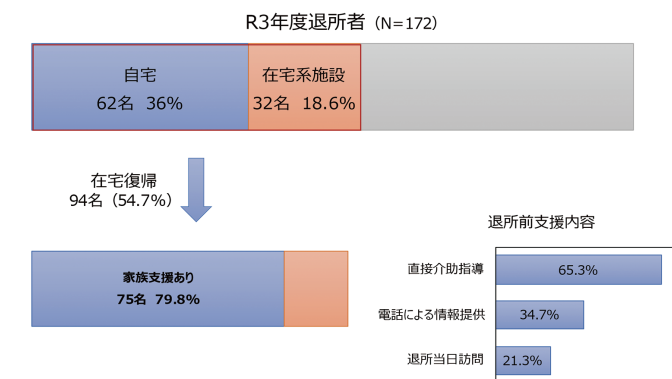
「地域とのつながりの再構築」に向けて

withコロナの状況下であっても、「地域とのつながりの再構築」に向け、在宅復帰・在宅生活支援施設として老健機能を地域に展開していくことは普遍的なものです。そして、改めて地域づくりにも参画できる老健でありたいと思います。

そのために「地域に足を運ぶ、そしてface to faceの連携を図る」ことは不可欠だと思います。今後は感染状況を鑑みながら、予防対策を施し、訪問活動再開も視野に入れていきたいと考えています。しかし、感染状況によっては再び活動制限が生じることも予測されます。入所中の本人・家族からの入所前生活や関係機関(ケアマネや紹介病院など)からの情報収集、入所中の職員間の情報の共有、そして、退所後の地域での暮らしを踏まえた情報提供と提案、退所後生活の予測等々…これまで以上に丁寧な対応が求められます。

さらに、今後は情報共有のツールとしてICTの活用がますます必要になると考えます。我々職員の自覚と新たな事象への適応力が支援のあり様を左右するのではないのでしょうか。

図3 コロナ禍における在宅復帰に向けた家族支援



執筆:介護老人保健施設「仲寿苑」老健連携・相談支援課長 牛島寛文